

技術哲学の展開

直江清隆（東北大学）

1, 科学哲学と技術哲学

科学に比べて技術は哲学的に論じられることが少ない。『科学基礎論研究』のバックナンバーを見返してみても、下村寅太郎の論文(1956)を含め数本に過ぎない。しかしこれは日本にかぎったことではない。今日に近い意味での科学哲学は、19世紀末から20世紀初頭のマッハ、ポアンカレ、デュエムらよって開始される。まとまった技術哲学の本が著されたのは、やはり19世紀末にカップら技術畑出身の哲学者によってであるが、科学哲学と違って、その後の展開は散発的であり、哲学の中でもかなり周辺のなものにとどまってきた。

ギリシア以来、技術はおおむね知の体系の外にあつて、体系性に欠けていたことが背景と言えようが、そのほかに上記の理由として次のような点がさしあたり思い浮かぶであろう。①科学とは違い、技術は理論の領域で終始せず、価値や実践との関係があること（ただし、工学が物理学などと違う独自領域をなすかどうか、工学の科学哲学で問題にしうる）、②伝統的な職人技術と違い、テクノロジーは科学化・合理化されていること（ただし、技術を応用科学と見なす議論は今日では少数派である）、などである。価値や実践との関係、近代の合理化などを取り上げる点では、技術の哲学は社会科学の哲学と類縁性があるように見える。だが、こうした点が分野内での方法論をめぐる議論を背景になされるのではなく、反省的な視点からなされるという点では、技術の哲学は自然科学の哲学と近いように思われる。

2, 旧来の技術哲学

1980年頃までは日本も海外も技術哲学の状況に大差はない。

一方では、技術畑出身の哲学者らによって、技術に内在する形で技術の本質について哲学的考察や人間学的考察がなされる。（ミッチャム(1994)はこれを「工学的技術哲学」と呼び、ブンゲによる技術の分析哲学もこの伝統に加える）。他方、第二次世界大戦後にはハイデッガー、マンフォード、エリュールらによって技術に対する文明批評的な技術批判が展開される（「人文学的技術哲学」）。技術について哲学的、社会学的議論がなされる際は、およそこのいずれかが引き合いに出されるのが通例であつた。

日本では、三木清、三枝博音といったアカデミズムの技術哲学は前者の傾向

を引き継ぎ、独自の発展を遂げる。道具と機械、とりわけ自動機械との区別、労働などに目配りがされるのが特徴と言えようか。これに対して、後者の技術の文明批評の伝統は、1970年代の科学批判を経由して、哲学者の間では今日根強く残っている。日本では、これに加えて、唯物論研究会における技術論論争を引き継ぐ形で、星野芳郎らによる技術論があり、『技術と人間』も現役の技術者を加えつつ批判的な議論を提供したことにある。アカデミズムの技術哲学では現場との接点が希薄だったのに対し、こちらは技術の現場をもって具体的な問題にも切り込もうとした点が対照的である。ただ、いずれにせよ、こうした議論から現在の科学基礎論につながる議論は生み出されないままであった。

3, 技術哲学の新展開

本報告では、以上を話の枕としてこの点について詳しく述べることにしたい。

技術哲学の現状を語るには、この要旨では、二つの潮流に言及するのが適当だろう。その第一は北米学派である。1974年に技術哲学会を発足させて以来、現象学、批判理論、プラグマティズム、分析哲学など多方面から技術に取り組み取り組みが生まれ、技術哲学が『分野』として成立するに至る。その中で際立つのが、非本質主義の立場であり、「人文的技術哲学」が前提とし、人間性に対立させていた「技術の本質」を批判し、文化社会的な人間性の存在構造ととらえるような視点を打ち出した点である。

第二は、北米学派を引き継ぐ形で現在、オランダを中心に展開されている技術哲学である。「経験主義的転回」(クローズ、2000)と呼ばれるその傾向では、経験的な素材に基づいた形での哲学的分析が主張される。科学哲学からするならば一見当然とも思われる立場だが、その背景には、形而上学的、規範主義的議論の伝統への抵抗がある。工学の基本的な概念枠についての科学哲学的な分析もその一例だが、とりわけ注目されるのは、人工物のあり方について、物理学的構造と人工物の機能の関係について「人工物の志向性」「二面性理論」と呼ばれる分析哲学的な議論や、人工物をカイして人間-世界の媒介という(ポスト)現象学的な議論である。これらは、人工物の設計という営みに対して、哲学的な光を当てようとするものである。

技術の哲学はようやく、科学基礎論の舞台に乗ろうとしている。1970年代まで、欧米の議論に依拠しつつも独自の展開を遂げてきた日本の技術論、技術哲学はいかなる方向を出そうとするのか、いまいちど新製品を輸入し、哲学の分野で閉じた議論をすることで充足してしまうのか。そのあり方が問われている。